
D × D 略奪者の手記

ゆかりえきす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D × D 略奪者の手記

【NNコード】

N5375Z

【作者名】 ゆかりえきす

【あらすじ】

ハンター×ハンターの世界に生まれ始める数々の作品の登場人物の能力を持つ転生者たち。彼らは何を求め、何を得るのか？

この作品は以前投稿していたD × D デイエゴの苦悩を加筆修正して再投稿しています。

ページ（前書き）

スマホで修正してたけど、なんか途中から出来なくなりました。まあ9割は終わってたけど。

ああ。何でことだらう。

私は敗北してしまった。

ありえない。ありえない。

こんなに簡単に私が負けるなんて、ありえない。

私は、こんなに素晴らしい力を手に入れているんだから……。

だから、これは何かの間違いだ。私が勝てないなんて、相手が何かズルをしたに違いない。そうでなければ、私が負けるはずが無いからだ。

無敵の力。

そう、私は何者にも不可侵の能力を手に入れているのだから。

そう結論すると、私は立ち上がった。今私がするべきことは、敗北

感に打ちのめされるよりも、次のために今すぐここから立ち去る」とだ。

思考の切り替えの早さは私の美点の一つだろ。私はそれによって自らと呼べるものを作り立ってきたのだから。

この世界に生まれた瞬間、私が感じたのは歓喜だった。

だつて、空想でしかないはずの事柄が、私の身に起つたのだ。

でも、次々と見えてくる鬱陶しい現実に私は次第に目を背け始めた。

特に、確実にそれがあると分かつていても、そこにたどり着くまでの道のりを考えれば、確実である分、質が悪いとも言える。

結局のところ、私は努力することから逃避して、日々の安寧を求めた。

幸い、私を囲む環境はそれを許してくれる程度には寛容だったから、私もそれを楽しむことにした。

それが崩れ去ったのは、あの男がやってきたからだ。

見たことがあるけど、見たことの無い、奇妙な格好をした男だった。

そいつとは一言も喋らなかつた。いや、声をかけようとした瞬間、私は攻撃されたのだ。

それは私を傷つけはしても、死に至るようなものではなく、男がそのまま立ち去つたおかげで私は生き長らえ、力を手に入れた。

かつて望み、しかし諦めた力を。

それに気づいた後の私の行動は素早かつた。まず自分のことを知る人間を家族を含め全て始末し、力を完全なものとしてから旅立つた。

そうしたことに対する罪悪感は無かつた。必要なことを必要なようにしただけ。とはいえて数十人分の腑分けは少々うんざりとしたが。

力を得て唯一不満だつたのは、まだ十代だつた私の顔は、数十年を経たような老人のそれになつていたことだが、他の部分には問題無いし、力を得た代償としてはむしろ安い部類だらう。声帯が変形したせいで、声も奇妙なものになつていたが、そちらはあまり気にならなかつた。

そうして手に入れた生活を満喫していた矢先、刺客がやつてきた。

最初は巨大な剣を持ち赤い外套を着た剣士だった。

そいつはたしかに強かつたが、単純な強さなど私の相手にはならない。適当にあしらつて見当違いの場所に行つてもらつた。

次に来たのは、蜥蜴のような何かの群れだつた。二足歩行するそいつらは、無数に出てきて、私がいくら力を、人形を使つても、後から後から湧いて出てきた。

だいたい10センチ程度のそいつらは、正面から破壊出来ないことを確信した後はひたすら人形の関節や内部構造を壊すことに努めた。

一頭一頭は弱いが、狙いが正しかつたことと途中からは人間以上の大きさを誇る個体までいたせいで、私の人形は最も信をおくウーニ力以外は全滅。

私自身は最初からいる廃工場の中で、自分の能力の敗北を悟つたわけだ。

残念だ。人形が壊されたのが残念だ。

また、人を殺して人形を作らなくては。

私の能力は糸を使用した人形の操作。

制約は、私自身が殺した死体から作った人形しか操ることが出来ないこと。だが、その代わり、その人形は生前と同じ瑞々しさで動作し、表情を浮かべ、言葉を話す。

能力が届く範囲は数キロ程度だし、複数体操作する場合人間以上の能力は発揮させることが出来ないが、それでも数百体を同時に操作できる。

もつとも、それはカタログスペックなので、実際は自分が殺した人間の数と同数の、48体しか操ったことが無いが。

それでも、人型の物体を動かす能力としては規格外だという自負はある。

今回は、単純に物量で負けただけだ。

私の人形は相手の蜥蜴もどきに比べれば、物量という意味では劣つ

ているが、それは質を向上させる」とで、例えば武器を持たせることで解決できる問題だ。

実際、何頭も銃で射殺出来た以上、あれは見た目以上に頑丈なわけではないようだ。

あれを使っていたのが誰なのかは知らないが、いずれ、私の人形の軍団で逆に踏み潰してやろう。

下等な蜥蜴もどきしか操れない、姿も見せない奴の末路には、その程度がお似合いだ。

そう考へ、ウーニカを伴つて工場から出ようとした瞬間。

「SYAAAAAAATTTT—!!—

頭上から、何かが飛び降りてきた。

咄嗟にウーニカに叩き落せるが、数が多い。次々と工場の床に赤い花が咲いていくが、敵は全く怯んだ様子は無い。一直線に、私に向かってくる。

一匹だけ、私の頬に爪でかすり傷を負わせたが、直後に叩き落され、地面の染みになった。

「うーにかハ、現時点^{デス}ノワタシの最高ケツサク^{デス}death。コノ程度ノ攻撃^{デス}ハ、キキマセン。ナニセ、始メテワタシガ殺シタ、大切な弟^{デス}deathカラネ。」

実際、ウーニカに操作を限定し、かつ私が至近距離から操った場合、並の人間では太刀打ちできないだろう。

どうせ、聞いてはいないうとあたりをつけての発言だったが、私の予想は完全に裏切られる。

工場の出入口に、攻撃される前には無かった影があつたからだ。

その影は、きれいには見えなかつたが、身長や身のこなしから大人の男であることが伺えた。

「……”人形使い”^{ペペットマスター}レオノフ。ようやく見つけたよ。」

「アナタハ、ダレdeath力？」

「想像は、ついているんだね?...?」

底冷えのする笑みを浮かべたその男は、そう言った。やはり、半日前に襲ってきたあの剣士と同じ、私への追っ手か。

「正直、心当タリガ多過ギテ、解リマセンネ。」

この言葉に、嘘は無い。私には命を狙われる心当たりが多すぎて、誰が彼等を遣わしたのかは解らない。それでもたかが手の指の数よりも少ない女の命ごときで私を殺そうとするなんて、なんて酷い話だらうか。

私は、ただ生きたいように生きているだけなのに。

「…何を怖がっているんだい?誓つて、俺は君に攻撃をしたりしないよ…?」

男の声は優しげですらあつたが、油断はならない。彼はほほ間違いなく蜥蜴もどきの能力者だらうし、姿を見せたということは、罷か、奥の手があるということか。

「だから、ホラ。ゲロを吐くぐらじこわがらなくとも、いいじゃあないか…。安心しろ…、安心しろよ…、レオノフ。レオノフ・ザ・

ペペットマスター。」

子供に言ひ聞かせるよつて書ひの言葉に、苛立ちが大きくなる。

高性能なウーネークの視覚を通して見たその男は、本来の私と同年代くらい、つまり二十歳前後くらいの美青年だった。

夜の闇の中で、いつそう輝く深い闇を感じさせる金髪に、整った、妖しいとすら形容したくなるよつた美貌が続く。体つきも完成されており、大きくはないながらも、彫像のような均整のとれた筋肉質な肉体を服の下から主張している。

言われて初めて自分が後ずさりしていたことに気付く。

「圧されてる?」「の私が?」「の男に?」

何故だ?ありえない。ありえない!

こんなチンケな能力者に、私が負ける」とも、ましてや脅かされることなんて!

くそ……、一度と……一度と……負けるものか……!

そう考へ、ウーネに内蔵せられてゐる銃を取り出そつとした瞬間、違和感に気付く。

あの男の姿が忽然と消えていたのだ。

何だ？ 何か、そう、見えなくなつてゐる。目の前にいたはずの男が見えない。あんなに目立つ色の髪をしていたのだから、隠れようとなれば解るはずなのに！

「…わいつをぬつた頬にはもう手を出さないといつていう言葉。あれは嘘じやないよ。なにせ、君は既に始末されてゐるんだから、ね。」

突然虚空から響いた言葉は、男がいたはずの場所から聞こえていた。

おかしいぞ。何故、言葉は聞こえるのに、姿が見えないんだ！！？

それに、始末つてどういつ意味だ？

「何処ダツツ！ 何処ニイルツツ！」

「ああ。大丈夫だ。恐怖は無い。俺の”太古の支配者”は、君から余計な思考を奪い、俺に忠実な僕としての生を与える。心を穏やかにするんだ。したくなくても、俺がそうと命じたりそうする。支配される幸福つてのはそういうことだと思うよ。」

男の科白を聞いた瞬間、私は叫びだしそうになつた。

意味が理解できない！男の正体は知つてゐるが、何故こいつが私を追つてゐる！？

理解不能！理解不能！理解不能！

頭脳の中を膨大な警告音が響く。

だが、私の足は、まるで別物になつたかのように、逃げようとしない。

敵と対峙している状況なのに、私はあまりの不可解さに耐えられず自分の足を見下ろした。

そこについたのは、巨大な鉤爪が生えたどつしりとした大きな足。それが、何故か私の下半身から生えている。

悲鳴をあげたかつたが、既に声帯も変形し始めているのか、出でこない。

それでも最後の瞬間、私はなげなしの思考を振り絞り、叫んだ。

「何故ダ！何故貴様ガココニイル！…？DHOツツツ…？？」

「……そんなこと、俺が知つてたら、もう少し苦労はしないよ。」

やはり見えない男、DHOが発した言葉は、何処か自嘲するような響きがあった。

もつとも、そのときには既に脳髄まで恐竜のそれになっていた私は、その意味は理解出来なかつたのだが。

「・・・終わったか？」

俺に話しかけてきたのは、相棒だつた。

黒いレザーの上下に真紅のマントといつ出で立ちは、暗闇の中でも充分に目立つ。いつそ変態的なほど。

俺は顎をしゃくってそいつを見せた。

相棒の視線の先には老人が立っている。

半開きになつた口のまま、何も無い虚空を見上げている老人という画は、あの世と交信でもしているのか心配になつてくるが、俺の念で何も考えられなくなつてているんだから、これは仕方無い。

”スケアリー・モンスター
太古の支配者”。

俺の念能力は、接触した相手を恐竜に変えるが、その副産物として解除しない限り、相手の思考を縛る、という効果もある。原作でのディエゴはフェルディナンド博士が触れてからしばらくして徐々に恐竜化し始めたのかもしれないが、俺はそういう風に解釈しているためか、能力もより有用なものになつてているようだ。

というか、人間と恐竜の中間みたいな姿でも支配できるなら、人間の姿のままで能力を解除しなくても大丈夫なんじゃ？と思つて試してみたら、イケた。

なんでもやつてみるものだ。

戦闘にも拘束にも使えるが、あえてアラを捜すならどこの能力者のようにポケットサイズまでは無理なのは欠点といえば欠点だろうか。

「お~、こいつが本体か。」

そういえば、襲撃したけど撒かれたんだっけ。

実力は俺よりも上だろうに純粹に戦闘にしか使えない能力しか持つてない弊害だな。これだから某戦闘民族みたいに戦うことしか考えてない脳筋は。

「で、ここいつもやつたん?」

「ああ。能力を教えたら、俺の名前を呼んでた。お前は知らなかつたみたいだったから、違つかと思つたんだけどな……。」

「十中八九こいつもトリッパーか。しかし、どうしてこいつ、犯罪者が多いのかねえ?」

嘆いているようだが、田は普段よりも酷薄なものになつてゐる。見た目に反して犯罪者には厳しい性質があるため、彼は怒りを感じているんだろう。

「さて、な。性善説を説く氣は無いが、しかし近道をして結果だけを求めるに、人間つてのは真実を見失うものらしいからな。洗礼で手つ取り早く能力を手に入れたが、それを何に使うのかまでは思考できなかつたんだろ。」

「なあ、それ、キルシーの前で言つなよ。ここは水が無いからよかつたけど……もし聞いてたらまた引きこもつちまつ。」

俺たちのもつ一人の協力者の名前を出し、彼
ンテが言つ。

言われてみればたしかにキルシーも洗礼で念能力を手に入れた口だつたか。

普段自己主張はほとんど無い彼女だが、しかしこンプレックスは数多く持つてゐるようなので、扱いは気をつけなければならない。

「さて……、それじゃ、あとはマフィア屋さんを待つだけってことか。」

「ああ。老舗のルードファミリーの『令嬢他8人を壊したわけだから、まともな死に方はしない』……っていうかさせてもらえないだろうつな。自業自得だけど。」

言いながら本人を見るが、そいつはきょとんとしたまま周囲を見回している。俺の命令が無い限り、誰も襲わないし誰に攻撃されても反撃しない。恐竜たちは、能力を解除しないかぎり、死んでもそのルールを破ることは出来ない。

「……ありや、噂をすれば影、か。来たみたいだぞ」

「聞こえてるよ。」

「なら、もうちょっと嫌そうな顔を隠しつけよ。」

「……へいへい」

エンジン音が聞こえて丁度一分後には、俺たちの眼前に黒塗りの乗用車が停まった。

降りてきた数人に對し、俺は会釈をした。ダンテは俺の背後で仏頂

面を下げるに至るだろう。嫌いでも、お客様なんだから、もう少し愛想良く出来ればいいんだけどなあ。

それどどひどもいいけど、いつこう職種の人つて黒塗りの「ゴツい車以外は乗らないのかねえ？’

「」Jの度は”D&D”をJ利用頂き、まことにありがとうござります。私は代表の「ディエゴ」、後ろが同じく代表のダンテです。

リーダーと思しき、ハゲテブチビヒゲの黒服に向かってそう挨拶すると、相手は手を挙げて鷹揚に挨拶した。まあ、こつちは下請け業者みたいなもんだし、じついう反応は当たり前か。

背後でダンテがイラつとしたのが気配で解ったが、今は抑えてくれ。

「堅苦しい挨拶は省いちまつてくれ。……で？お嬢をあんな姿にした馬糞野郎はそこの中か？」

「ええ。現状、私の念で拘束してありますので、逃げる心配はありません。すでに武器は取り上げていますので、どうぞ回収を。」

リーダー、たしかゼンジさんだっけか……?は違うようだが、手

下たちの何人かは念能力者のようにだから武器が無い上、口クな基礎修行も積んでない人形使いなんて、抵抗も出来ないだろ。う。

金を受け取りながらそう応えると、指示された手下たちがレオノフを運んでいく。必要ないかもしねないが、能力は解除してないからまだ本人は無抵抗なままだ。

彼はこれから糞によく似た人生のツケを支払わせられるわけだが、不思議のことに戸惑感は全く湧かない。

勿論、同郷者なので、助けられるなら助けてやりたいが、連續誘拐と婦女暴行をやらかしていると、それも考え辛い。

マフィア屋さんからの依頼を反故にして、相手を敵に回して、さらに部下や仲間を場合によっては危険にさらしてまで守る気が起きなかつたせいもあるんだろうけど。

そう考えてみると、疑問が浮かんだ。

いつの間にかフェミニストになつたんだろうか？そういうのはダンテの役なんだけどな。

今まで手にかけてきた人間の数を考えると、正直今更な気もするん

だが。

思考を振り払うように、車の中で両脇を能力者に固められたことを確認してから、能力を解除。

次の瞬間、悲鳴が上がるが、それはすぐに物理的に止められた。

合掌。どれだけの時間があるのかは知らないが残りの余生は他人のために消費されてほしいものだ。

「『』苦労さん。今度、暇だつたらウチに遊びに来てくれや。」

ゼンジさんが機嫌良く言ったので、俺は追従をしておいたが、正直金払いがよくなればこういう人種とは係わり合いになりたくない。

前世でも言えることだつたが、俺は普段から物騒な人に関わりを持ちたいと思うほど奇的な趣味はしていない。

走つていく乗用車を見ながら、とりあえず渡された金を確認する。札束の数からして、5800万ゼニー。依頼から1日以内だつたら、けつこうイロをつけてくれたみたいだ。

能力に使うための死体はあちらさんが用意してくれたから、今回はこれが丸々儲けになるわけか。

闇医者やら臓器ディーラーをあたらなくていいし、草むらで捕まえた虫は俺の労力以外はプライスレスだし。

はつはつは。笑いが止まりませんな。

「ハツ。そのまま札束の風呂でも出来そうな量だな。」

金を持つたままこやしていた俺を見たダンテが皮肉げに囁つ。

どんな頭の悪い靈感グッズ販売チラシだよ。これを持つだけでムキムキに、何故か人生バラ色で美女がウチにやって来ましたってか？

「これを使う必要も無くお前の預金残高なら出来るだろ？」

俺も相棒も、おまけにキルシーも全員が預金残高は9桁ある。

本当のところ、無駄遣いしなければ働かなくても生活は出来るのだが、糺余曲折あって小さな会社なんかをやっている。

理由は思い出したくない。概ね、それらはトラブルだからだ。

トラブルが楽しくなるほど人生の安売りはしたくない。俺は原作を地でいつているダンテとは違うのだ。

俺の科白を聞いたダンテはそいつはクールだ、と言つて笑つた。

俺は肩をすくめた。

割と長い付き合いだが今ひとつこの笑いのセンスが理解出来ない。

さて。

会社に戻るにしそう。多分、キルシーが待ちくたびれているんだろう。

今日はラーメンを奢つてやることを約束したから、急がなくては。

そう考へ、俺はダンテを伴つて、誰もいなくなつたその廃工場から出て行つた。

ああ、そりそり。

どうでもいいことだが、俺は転生者だ。

生憎、全能の割りにやたらとミスが多くて人間をトラックで殺すのが好きな神様にも宗教的に輪廻転生を司つてそんな仏様にも会つたことは無いが、別世界で二十数年を生きた後、死んで何の因果かこの世界に生まれ変わった。

こいついう言い方をすると、大仰になってしまつかもしれないから、別の言い方をするが、ただそれだけの『奪う者』。

それが俺、ディエゴ＝ブランドーの嘘偽り無い現状だ。

ページ1（後書き）

キャラ紹介

ディエゴ

本名、ディエゴ＝ブランド。元ネタはジョジョ七部SBRに出てくる、石仮面が無い世界のディオ。

ダンテ

元ネタはDMCシリーズの主人公。やたらとスタイリッシュ。

レオノフ

レオノフ＝ザ・ペペットマスター。元ネタはトライガンの悪役。

転生者になつて困つたこと？

うへん、生まれてしばらくは羞恥プレイに毎日だったのが地味に堪えたこととか？

でもそれは意外とすぐに慣れたし、違うか。

家族が誰もいなくなつても引き取つて育ててくれた人たちもいたし、そんなに困つた覚えも無いし。

ああ、念能力を使いたいから精孔を開こうとしたけど、修行を始めて7年くらい駄目だつたのは多少堪えたかな。なんての？何も無い地面を延々と何かが出てくるまで掘つてくるような心境つていうのかな。

何かがあるはずなんだけど、その何かは1メートル下にあるのか、それとも100メートル下にあるのかもわからないワケだし。

ゴールが見えないのに頑張るつてのは結構疲労感が溜まる。

念能力が使えるようになつてからの基礎修行もシャレにならなかつたから、結局修行時代はしんどいことばっかだつたけどさ。

うん、なんか過去を思い出すと辛いことが多いのは気のせいかな？

： 気のせいであつて欲しいな。
本當。

現在進行形で結構しんどいからさ。

「シイイイイイイイイイイイイイイイイイイツツツツ！」

流れる風景の中。眼前の一点を射抜くために、俺は一本の矢のよつに攻撃を仕掛けた。

手段は単純。ただの、しかし渾身の力を込めた突き。

『凝』をするまでもなくオーラがあふれている右手が当たれば、厚さ数センチの鉄板であってもブチ抜くことが可能だろう。いわんや、人体など議論する必要も無い。

胴体だろうが腕のガードだろうが、確実に文字通り『突き』破ることが可能だ。

勿論それは当たれば、の話であるわけだが。

俺が突き出した貫き手が、空を切る。ターゲットは流れるようにスウェイバックすると、同時に攻撃態勢に移る。

ターンが交代。気合が空回り。クソ。

内心で悪態をつきながら攻撃に回していたオーラを素早く足に移動。床を踏み碎きながらイッキに後退する。

にやけた顔の下、黒と銀の銃口から弾丸が吐き出される。

次の瞬間、響き渡る轟音。

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガツツツ
！！

二丁の拳銃から、それこそマシンガンのように吐き出される弾。銃身は熱で変形することも無く、ジャムすることも無い。削岩機のよに周囲の風景を削り取つていく。

一流のガンスミスの作らしいが、正直ここまで一級品にしてほしくは無かった。主にそれを向けられる立場としては。

一発一発が軽く肉を抉る程度は威力がある上、ここまで異常な勢いで連射されれば直撃したら死ぬだろ？。

逃げても銃弾の群れの追尾からは回避できない。遮蔽物の無い場所ではこいつの攻撃はキツい。

避けきれない弾は指先に移動させたオーラで弾いて他の弾をそらせていいくが、数が多くて意味が無い。

ポケットから恐竜化した虫を出そうとも、出した瞬間に血と臓物の前衛芸術にされるだけ。

囮すら正面から無効化出来るなんて反則だろ、クソ。

…やっぱり体術でしとめるしか無いか。

そつ結論すると、距離をとる。すぐに床板を蹴り起こす。

すぐさま床板に食い込み始める銃弾。10秒持てばいいほう。

改めて岩に蹴りを入れると、トラックで轢かれた人間みたいに吹っ飛んでいく。勿論、さつきから俺にウザつたい攻撃を仕掛けていた敵の方に向けて。

さすがにあんな口径の弾じゃ自分に届く前に破壊することは出来まい、と読んでいた俺の予想は完全に裏切られた。

一瞬、銃声が聞こえなくなつたと思つた瞬間破碎音を響かせ、一発の銃弾が床石を破壊するッ！！

……はあ？ 何それ？

岩を一発で破壊する弾丸とかアリかよ？

混乱しながらも、次の床石を引っ剥がして投げつける。

一瞬後、やはり粉々に碎かれる岩。どこの主人公みたいにはいかないか。

だが、あの威力の高い弾は多少は、溜め、が必要だということが分

かつただけでもやつた価値がある。

「……どうした？十秒やるから選べよ。棺桶かゴミ箱か。手前の行き先をな。」

攻め倦ねていた俺に、スタイルッシュ馬鹿が言つ。

「なに、お前を置物タイプの恐竜にしたりビニに置くか考えてただけだよ。生憎、無駄にデカいから庭のスミか倉庫の端っこくらいしか思いつかなかつたけどな。」

軽口を返し、思考する。コイツは遠中近3通りの戦闘で使える能力を持つた戦闘専門の能力者だ。

それに対して俺は近距離 + 半自動の遠隔端末を作り出す能力。腹立たしいが距離をとつていても、俺に勝ち目は無い。

現在、彼我の距離は100メートル前後。あっちの攻撃は余裕で届くが、こちらは走つても数秒かかる計算になる。

……多少賭けになるが、そつでもしないと無理か。

そう考へ、余裕の表情を浮かべている馬鹿を見る。

「……8、9、10。じゃ、死ね。」

間抜けなカウントが終わり、無情な死刑執行の合図がされた。

仮にも相棒に向かつて言つセリフ、じやないような気がするが、そういえば俺も日常的に言つていたような記憶もある。ま、いいか。

再び銃口から吐き出される弾丸。俺はさつきまでのよつて、床石を踏み碎く。その中で一番大きな盾を持ち上げると、盾にして乱射魔に向かつて走り始めた。

前へ。前へ。中々重いが走る邪魔になるほどではない。

肉を抉れる銃弾も、岩までは貫通できない。だが、相手にはもう一つの手がある。

一瞬の静寂。俺はポケットから中身を引きずり出してつつ、オーラを集中させた左手で岩を思いつき突き出すッ！

直後、正反対から岩を粉碎する弾丸ッ！！

バラバラと空中で崩れていく岩を見ながら、しかし俺は次の一手を打っていた。

オーラを集中、かつ『変異』した脚力を使用し、常人には到底不可能なジャンプ力を発揮。銃を構えた阿呆までの距離をイツキに詰める。

当然相手も撃つてくるわけだが、今度はオーバースローで右手に持っていたモノを投げつける！

「SYYYA AAAA AAAA AAAA ! ! !」

それは全長がせいぜい6～7センチ程度の、奇妙な蜥蜴。一二足歩行するように後ろ足が頑強に、反面前足が不自然に小さい。

外皮は独特の模様があり、見方によってはアルファベットの『D I O』という綴りに見えなくもない。

そんな奇妙な生き物が数えて10匹。それぞれに放物線を描きながら、ターゲットに迫るッ！

だが、ヤツは冷静に銃を構えなおすと鶴撃ちのよひで自分に近い恐竜から撃ち落していく。

囮はやはり無効化される。

だが、それでいい。

俺の能力は文字通り一撃必殺。当たりさえすれば、後は相手を煮るなり焼くなり好きに出来る。

だからこそ、相手は俺の攻撃の全てをかわすか、牽制しなくてはならない。

さらに一步。攻防力80%を前半身に。残り20%を足し。

速度を優先しているので避けきれずに何発か食らうが、それでもかなり痛いだけで皮膚を破るほどではない。

ついに後一步のところまで接近した時には、相手は恐竜を全て撃ち落としていた。だが、俺は既に攻撃態勢に入っている。

「殺つたッ！」「甘えんだよ馬鹿がッ！」

お互いの声が交差した瞬間。

俺の貫き手はダンテの鼻先に。ダンテの一丁拳銃は俺の頭と心臓にポイントされている。

一触即発。一ミリでもどちらかが動けば、それよりも先に相手が攻撃するだろ。

まるで決闘でもしているようだ。

どちらも動かず、動けず、いつまでもこの体勢のまませざることになるのだろうかと考え始めた頃

「ああ、クソッタレ。痛え、調子乗つてバカスカ壊しやがって。糞共が。倍額^{かか}払えってんだ。それか死ね。全身が緑色になつて融けて死ぬ病氣に罹れ。」

部屋の中に唐突に声が響く。若い男の声だ。

「おー、今まで馬鹿面をげてお見合にしてんだ。止める止める。ついでに俺まで殺す気か？ああ？」

そう声が響くのと同時に、俺とダンテの隣の空間が捻れるように歪むと、その中から青年が現れた。

真っ黒な上下の服と、過剰なほどつけられたシルバーアクセサリー。長い黒髪には同色の帽子が被せられている。

そして田は腐った魚のように濁り、その下には見間違えようがないほどはつきりとしたクマがあつた。

表情は言葉通り機嫌悪そうに、しかも右手にはナイフを持っている。攻撃のキーまで持っていることは割りと本気だな。

「オーケ、止めた。」「…………。

この場のオーナーからストップがかかつたらダンテと戦っている場合じゃない。下手をすれば、2人共が殺されることになりかねない。

「……しかし、まあ壊せるだけ壊しやがったな。」

そう言って部屋の中を見回す青年。確かに、俺が碎いたり引き剥がした床石がそこかしこに散らばり、銃弾で破碎されたせいで壁は無

事な部分を捜す方が難しい状態だ。

なるほど、この状況じゃ部屋の状態と体調がリンクしているコイツには辛いだろう。多少違うが、胃壁がボロボロの状態を想像すると判り易い。

「命拾いしたな。」

「気のせいか？どつかの間抜けが言つたそれ、俺のセリフっぽいんだが。」

空気の読めないダンテの言葉に、また雰囲気が悪くなっていく。念の修行をする前に対人関係の訓練をしろと思う。常識人の俺ですら、これなのだから今までどうやって他人と関わって生きてきたのだろう。別段興味も無いが、疑問ではある。

一瞬俺が大人になるべきかとも考えたが、しかしいつでも妥協すると思われたらこのアホをつけ上がらせるだけだ。

「どんなヤツでも死ぬ前には必ず自分の身の程知らずが理解出来るんだから、人生ってのは良く出来てると思わないか？」

「低能属脳筋科痴呆亜目の生き物がなんか言つてるけど、高尚な俺

の頭脳には理解出来ないな。多分、知能指数が低くないと翻訳できない言葉なんだろ。可哀想に。」

「糞みたいにその口から垂れ流してゐる臭い息はもう一個尻穴をこなしてやつたら多少は止まるのか？ そうだな、その使い道の無さそつた蜥蜴頭のど真ん中あたりに作つてやるよ。」

「おお、頭を使って喋ることが出来たのかミスター・スタイルッシュ（笑）。今世紀最大の発見だな、今夜は祝杯だ。ああ、チンパンジーに言葉を覚えさせるくらいの根氣があれば、アンタとしたくもない会話が成立するんだからな。」

再び険悪な雰囲気の中に「らみ合」が始まる。

考えてみると段々本当に腹が立つてきた。何故俺が毎回「いつのためにストレスを溜めなくちゃならんのだ。そもそも今年に入つてコイツのせいで何回ウチの会社が訴訟されそうになつたと思っているんだ破壊マニアの乱射馬鹿が！

荒事には呼んでなくても何故か来るくせに、書類整理とか会議とか地味で大事な仕事は「こと」とくすっぽかしやがつてッ！！その上俺よりも実力が上だけど「俺達はライバル兼相棒だぜ」とか脳の不在を疑う発言も含めてッ！

どんだけ他人様（主に俺）に迷惑かけるつもりだこのヴォケがツツ
ツツ！！！！

……脳内で絶叫したので多少は冷静になれた。うん、俺は冷静だ。
素数も簡単に数えられる。

1、2、3、5、7、11、15……は違うか。まあいいや、どう
でも。

ふとダンテを徹底的にブチのめしたい衝動にかられた。ここまで距
離が近ければ一息で接近できる。そうすれば、あの五月蠅い口を少
し静かにしてやれるだろう。

だが、それはあちらも同じこと。距離を詰められれば今度こそ背中
の大剣を抜くだろう。そして、その厄介さは銃の比ではない。

理想的なのは、剣を使われる前にこちらの能力を使ってしまうこと
だ。だが、しかし俺達はもう一人この場にいるのを忘れていた。

「…………面白えぞ、手前ら。俺の言つたことが理解できねほど頭が悪
いってのか？ いつ死ぬか？ ああ？ だつたら火葬代がいらねえよ
うにここで骨まで溶かしてやるよ。感謝しやがれ」

隠す氣も無いほど強烈な怒氣を纏わせた声が俺とダンテにかけられる。

元々ダンテよりもさらに短気な王がナイフを手首に当てたのでやめておくことにした。コイツの場合、話の流れによつては本氣で俺たち2人共を殺しにかかるだろ？

「コイツにはそれだけの能力がある。それに、さすがにこんな場所、こんな理由で命に関わるやりとりはしたくない。」

「2人してバンザイすると納得してもらえたのか、「金はいつもの口座に振り込んだけ」という言葉を最後に王は現れた時と同じように空間の捻れと共に消えた。実に便利な能力だ。」

どちらからともなく部屋を出ると、王が消えたのと同じように念空間への入り口が消失する。今俺達がいるのはアンティーク調の調度品が飾られたこざっぱりとした一室だ。

壁にかけられた時計は既に12時を回っている。食事にしようか。いや、先にキリの良いところまで仕事をするべきか。そう考えているうちに不愉快さの元は部屋から出て行つた。

ま、トリ頭だからさつきの口論も今夜には忘れているだろ？でなければ実力はあってもあそこまで性格に難のあるヤツと共同経営など

んて出来ない。

そう考え、誰もいなくなつた部屋で黒い革張りのソファに座り込む。疲れが出てきたのか、妙に喉が渴く。応接机の上に置きっぱなしにしていたペットボトルを掴むと、中身を飲み干した。

テレビをつけると、ニュースがやっていた。キャスターが語る横に浮かぶテロ、殺人、紛争の文字。^{テロップ}今日もこの世界の住人は元気に殺しあつているらしい。

陰鬱なニュースにテレビをつけたことを後悔し、仕事机に戻る。

デスクの上のPCを起動。仕事を再開した。

俺の、DIEGO & DANTEサービスの代表としての一日は大体がこんな感じで送られている。

俺が、転生者がこの世界に多くいることを知ったのは少し前の話である。

農場の小作人の息子として生を受け、紆余曲折があつて念能力を開

花させるまでに至ったわけだが、それまでの道のりが平坦ではなかった分、自覚はなくとも自分がなんらかの物語の主人公だと思い込んでいた部分は少なからずあつたらしい。

なので自分以外の転生者にファーストコンタクトしたとき、不覚にも俺は混乱してしまっていた。

まあそこは追々語るとして、今は俺も属している転生者について考えてみよう。

生まれる年はここ数十年以内であることを除けばバラバラ、性別に偏りがあるわけでもないらしい。だが、転生者には2つの共通点がある。

一つは、なんらかの物語のキャラクターの容姿とその姓名を持つて生まれてくること。

俺はディエゴ＝ブランドー。相棒はダンテ。共に創作物の世界の住人だ。

考えてみれば悪役の俺と主人公のヤツが組んでいることも多少奇妙ではあるが、それはどうでもいい。原作では仲間同士だったキャラクターの転生者が殺しあうことも珍しくないのだし。

一つ目は俺達転生者は自分の元になつてゐるキャラクターの能力を模倣することだけに長けてゐる、ということだ。

これにはいくつかの仮説がたてられてゐるが、自分の能力の『完成品』を知り具体的なイメージを持つていてこと + それを完成させる才能を持っている、というものが有力だ。

普通なら完成させるのに数年をかけるか強い制約が必要になるような能力も、半分以下の期間、弱い制約で使用可能になる。

これは大きな利点だろう。お陰で今俺はこうしていつぱしの念能力者気取りが出来るわけだし。修行時代の地獄を思い出すとどうしてもそう思えてくる。

だが、メリットはそれだけだ。

身体能力に関しては関係が無いようだが、念能力は判断がシビアだ。一部でも元キャラにそぐわない部分があればそれはオリジナルな能力とみなされ、習得に普通の才能を持っている人間の倍以上の期間がかかるようになり、既に習得している能力であつたとしても余計な機能を付け加えたせいで効果が不安定になるというデメリットまである。

下手に制約を強くしても結局それを遵守出来ず、痛い目に合つヤシ
も少なくないらしい。

俺もかなり強い誓約と制約をしている身なので、このあたりは他人事ではないのだが。

まあ、ともかく今も世界のどこかでは転生者が生まれ、死んでいることだろう。

転生者同士の「//コニティーもあるが、それに関与していない身としてはそつ考へるしかない。

食後のコーヒーを飲みながらつらつら俺が考へるのは、そんなことだ。

ページ2（後書き）

王天君

元ネタは藤崎竜版封神演技。

外見は原作準拠だが、性格はガラが悪い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5375z/>

DxD 略奪者の手記

2012年1月8日01時51分発行